

# 墓参り

かいとうじゃくちゅう  
械冬弱虫

卒塔婆に書かれた

埋葬の葬という字の中心に 鎮座する死

それが与える 重力のような恐怖から

私の視線は とうとう 逃げるのをやめた

死というものを

身近な人が ふっといなくなることを

まざまざと 理解させられた

その瞬間を迎えるまでは

どうにも死は

灰暗い煙のようで 掴みづらいものに思えたが

やっつと

死は実体を持つのだと 分かってしまった

真新しく彫られた 白い戒名の前で

ただ私は

土の中で すよすよと

寝息をたてて 眠っていることを

想像することから逃げてしまうような 苦痛の鎖が

今は解かれていることを

祈り 慰めとするほかはない

# ハタチ

械冬弱虫

鬱々とした少女に似合わぬ 赤い振袖

その手には 同じ赤色の巾着が提げられていた

左手に絡まった 巾着の紐が

まるで自傷痕のように 手首に抜がっていた

少女とその同級の者たちは

社会に充満する瘴気から 身を守るため

ガスマスクを被り

ただ キッと 前を見据えた